

「唐代小説研究」(その三)

劉開榮著
西岡晴彦訳

(承前)

第三章 朋党の争と周秦行紀

周秦行紀は三千字たらずの一篇の小説にすぎないが、唐一代を通じて最も深刻に重大な社会政治的な問題、即ち朋党の争を反映している。社会と政治は本来相互に因果関係にあり、社会問題は往々政治の変化に影響し、政治問題もまた社会的現象を複雑化させるものである。周秦行紀はこの二つの重なりあつた複雑な関係の産物である。故に唐代社会と政治の実態を明晰に理解するには、周秦行紀について詳細な研究を加える必要がある。

従来周秦行紀の主題、作者、時代について述べられてきた説は、多くは臆測であり、確実なものではなかった。その原因は、直接の研究材料が極めて少かつたからである。つまり、牛僧孺作と題される周秦行紀の本文と、李徳裕の窮愁記所収の周秦行紀論以外には、皆様々な書籍の中で偶然発見されたものしかなく、もし周秦行紀について最終的な結論を得ようとするならば、唐代のすべての資料に一気に読み終えねばならぬ。唐代の史籍は膨大であり、個人の能力には限りがあつて、時間的にも不可能なのである。その上、昔の人間は版權という觀念はなかつたし、周秦行紀はその上、意図をもつて書かれ、作者は自分の名が出るのを恐れていたのだから、自ら名

を明らかにして、禍いが及ぶようなまねはしない、後の研究者にとって、この事情が、困難を倍加させることとなつたのである。こういった次第であるが、ともかく、できるだけ研究につとめ、その結果を以下に示すこととしよう。

第一節 周秦行紀の主題

周秦行紀の主題、或いは作者の執筆の第一の動機が何であるかを明らかにしようとするには、まず周秦行紀の背景となる朋党問題について知らねばならない。この問題は、上述した社会政治の中にすでに久しい間に醸成されつつあつた問題の結晶であり、周秦行紀はこの結晶の反映であり、又、その具体的表現である。

この小説は李徳裕党の人が牛党の領袖牛僧孺とその党人を中傷することを意図した攻撃の爲の文章である。この点については歴代の学者の研究によつてほぼ定説となつていたので、こゝでは重ねて云云しない、いま討議すべきは、周秦行紀のテーマと、採り上げられた材料がなぜ牛党を攻撃する道具となり得たかということである。そして、この題材の反映している社会政治的現象が、結局どのようになつて形成されたか、この問題について、妥当な解釈がなされなければ、その他の問題は未解決のままとなつてしまふのである。私見によれば、周秦行紀に反映しているのは前述のように、当時の

朋党問題であり、もっとはっきり言えば、二つの対立する階級の政権争奪問題なのである。

唐代の階級対立の根元はすでに東漢時代にあった。当時礼法を守り、儒教的倫理を標榜していたいわゆる名門の連中と、その他の人間との対立があり、この現象が魏晉に至って、曹氏の魏と司馬氏の蜀との対立となる。魏（拓拔魏）は中国に侵入した時、儒教を利用して中国を統治しようとした。この際にこれらの名門連中が、つぎつぎと勢力を台頭させ、崔・盧・鄭・李などの貴族が中原における実際の統治者となり、門閥制度はこの時代から基礎を定めることとなる。

こうして隋代になると、政治は彼等の支配を受けるようになり、帝王と称する者も、単に彼等のかぶる帽子にすぎなくなってしまう。

しかし唐になると、太宗は英明な天子だったので、社会を見とおし、歴史を見きわめる目を具えていて、歴代の天子、とりわけ隋の天子が滅ぼされた原因について、早期に洞察することができた。そこでこの貴族どもをおさえようと決意し、山東土族と訣別し門閥貴族以外の人々を抜擢し、自分又は自分と出身を同じくする人々を擁護して旧貴族に代えた。太宗の施策を見るに、この一点についてかなり苦心のあとがわかる。いま、唐史の中から任意に一、二の部分を取りあげて証拠としよう。

「帝（太宗）は言った。『私は崔・盧・李・鄭（当時第一流の名門）を嫌っているわけではないのだが、彼等は世道がすたれても、役につこうとせず、……不肖の子でありながら、自らを善しとしてきた。……齊は河北に拠り、梁陳は江南に国をつくった。だからたとえ有為の人物があっても、中央から離れていけば、貴ばれなくて、崔・盧・王・謝が世に重んぜられるようになったのである。私の臣下の諸士で、忠孝学芸によって私に従い天下を平定しようとする

る人々が、どうしてこれらの旧門閥に金を支払ってまでも、世評に従い、実のない連中と（婚姻を買賣のを榮誉とするのだろうか？）朕は今日から朝廷での位をその一門の等級の高下とすることにしよう』そうして、崔幹を第三姓とし、そのことを天下に書面で公表した。」（新唐書、卷九五、高俊伝）

太宗はこゝで明らかに、南北朝期に實質的に中国を支配していた階級を抑圧し、政権を自分に随って天下を平定した一般人の手に委ねようとしている。それ以後高宗、武后、玄宗は皆同じような政策を堅持した。

「玄宗は宰相を任用する時に、まずその名を書くことにしていた。ある日崔琳（神基の長子）の名を書き、金甌で蓋をしておいた。そこへ太子が入ってきたので、帝は『これは宰相の名だが、おまえ、誰だかあててみよ、もしあたらたら、酒をあたえよう』と言った。

太子は『崔琳でなければ、盧從愿ですか？』と言う。帝は『そうだ』と言った。……その頃この二人は宰相のよび声が高く、玄宗もしばしば任命しようとしたが、彼等が大族の出身で、とりまきが多すぎるのを恐れ、ついに任用せずに終った。」（新唐書卷一〇九、崔琳伝）

思うに崔、盧は太宗に抑圧され、第一姓（最高貴族）たることを許されなかったのに、社会の伝統は牢固として破れず、玄宗の時代まで依然として勢力が極めて大きく、才能評判ともに高かったのだが、玄宗は彼等が旧貴族に属していたので、用いなかったのである。

中唐時代になると、この種の階級的な問題は發展して最も重要な政治問題となった。その近因は則天武后の個人的政策と直接に関係する。彼女は、政治的野心の強大な人で、自分を擁護する人物を物色した。太宗の国策を継続しただけではなく、礼儀作法にうるさい旧貴族を抑圧するとともに、李氏の唐王朝を擁護する新興貴族階級

をも打倒しようとした。そこで第三の階級を抜擢する政策を定めた。この階級には、平民、商人、小吏が含まれた。彼女は彼等を自分を支える基盤にしようとしたのである。太平広記卷二五五(張鷟)の条に、彼女の破格な人材登用の話がある。

「則天は天下をとつてから、無差別に人を任用した。低い身分から身を起して、御史、評事、拾遺、補闕になった者は、教え切れないほどであった。張鷟が諺を作った。『補闕は車に何杯も、拾遺は枿で計るほど、かきあつめの御史、梳からこぼれる校書郎』……又、南の庭でこれに続けて四句、『評事は法律を読まず、博士は本を開かぬ、頭の鈍い巡撫どの、めっかちの聖神皇帝』……」

ここでは、役人が多すぎることを嘲るだけでなく、任用された連中がみな、法律を読まず、本も開かずといった庶民上りの役人で、本来政治の舞台に参加する資格のない人物であるところからかかっているのである。

武后の政策でもう一つ重要なのは、科擧の内容を改変したことである。即ち、経術の試験をやめ、詩詞雑文の試験に改め、地域や階級を特定せず、誰でも受験できるようにした。この二点は特に山東貴族に向けられたものであった。なぜならば経術は彼等の専有した父祖伝来の学問で、一般の間人は普通勉強しようと思えなかったものだし、又地域の制限をとり払ったので、科擧はもはや地方の名士の管理下におかれるのではなく、平民でも任意に受験できるようになった。その上、詩詞雑文は人の聰明さや悟性に深くかかわっていたから、貴族の子弟は勿論上手ではあったが、平民でもそれほどヒケをとるわけではない。こうして階級的な障壁は攻めずして倒され、政治の門は日ごろ片隅にあった一般人に大きく開放された。しかし山東貴族の方も尻ごみしたわけではない。彼等は次第に環境に

適応する術を知りはじめ、経術を抛棄し、詩詞雑文にとりくみはじめた。こうして中唐になると、科擧出身者が次第に多くなり、政治上にも勢力を拾ってきた。こうしてこの兩党の対立する局面が形成され、党争の爆発は憲宗朝の李吉甫(趙郡の李姓、李徳裕の父)が執政中におこった。では李吉甫はどのようにして政治の舞台に上ったか?(新唐書卷四四、選舉志)に次のような記述がある。

「李徳裕は言った。『……私の祖父(李栖筠)は天宝末、他の道がなく、無理して受験したが、一度通ってしまったら、家には文選など置かなかつた。……』」

李徳裕は李吉甫について政治の舞台に上つて憲宗朝の宰相となった。その他、趙郡の李姓の李紳や李降等が宰相となった。彼等は各々続けて詩詞科を廃し経術科を設置し、品等(家柄による階級差別)を定めることを要求したが、相手方の勢力が大きかつたために遂に成功しなかつた。

唐史に著名な朋党の禍がどのように爆発するかを以下に見ることにしよう。

「始め、李吉甫が憲宗の宰相だつた時、牛僧孺・李宗閔(兩者ともに未来の牛党の要人)は直言の策を天子に献じ、要路にある者の失敗を痛撃した。吉甫は彼等を弁護し、天子に涙ながらに訴えたが、高官たちはすべて罪を得たので、彼等から怨まれることになつた。」(新唐書卷一〇五、李徳裕伝)

「李宗閔は牛僧孺とともに時の政治をきびしく批判し、宰相李吉甫の事にも触れたので、李は彼等を憎んだ。……長慶のはじめ、錢徽が、貢擧の主任試験官だつたが、宗閔は徽に自分の知己のことを依頼した。李徳裕、李紳、元稹が翰林院に居て、天子の寵愛を得ていたので、皆で徽の試験は不正であると上申した。宗閔は劍州刺史

に左遷され、これ以後彼等は互いに忌み嫌いあい、党派を結び、およそ四十年間せめぎあつた。官僚間の争はやむことがなかつた。」

(新唐書卷百七十四、李宗閔伝)

この表現はいずれも表面的に火花が散つた例だが、實際は、唐の建国以来、久しく鬱積してきた社会問題が、李吉甫の登場とともに尖锐化、明瞭化したのである。そして政治上で大党派を結成し、自らの勢力を配置し、穆・敬・文・武・宣の歴代の王朝においても、彼等にお互いにせめぎあい、消長盛衰をくりかえした。この事實は、史書に明らかに、しかし断片的に記載されている。その実態を小説において最もよく反映しているのが周泰行紀なのである。

周泰行紀が世に出た時、一般の人は皆、周泰行紀論(李党の領袖李徳裕作とされる)に騙されて、この作品の著者を牛僧孺(牛党の領袖)であると考えていた。五代の頃まで一般にそう信じられていたのである。

周泰行紀誕生の政治社会的背景は前述したので、小説自体について、その主題、作者の強調点は何かを一歩つっこんで明らかにしよう。この点については、周泰行紀論を、小説と並列させて読む必要がある。なぜならばこの論文は小説の註釈又は解釈であると考えられるからである。

周泰行紀論には二つの重点がある。一つは牛という姓が王朝を亡ぼす予言に照合するものであること、二つは文中に「沈婆さんの息子(徳宗)が天子になった」という罵言と、作者が昭君(漢の元帝の妃)に夜伽をさせるといふ事である。「論」の作者は、小説の作者が天子を侮辱し、皇帝に叛逆したことをくりかえし述べ、ひたすら皇帝を怒らせ、牛党を消滅させようと希望しているのである。当時の皇帝は個別の好みがあり、時には李党に肩入れし(武宗)時に

は牛党を重任し(宣宗)、大よそは中立的で、定まつた政策を持たなかつた。

まずこの第一の点について分析しよう。牛氏が唐王朝にとって代る、という予言は、玄宗時代以来すでに盛んに説かれていた。この予言の真偽は儲宗時代になると判然となることになる。たとえば(新唐書卷一三三、牛仙客伝)に

「牛仙客はもと県の小役人の出であつたが、帝は彼を……開元二十四年……工部尚書、同中書門下三品とし、門下省の管理に当らせた。……帝(玄宗)は仙客を任用したが、世間の評判が芳しくないので、それとなく高力士にたずねると、力士は『仙客はもともと小役人で宰相の器ではありません。』と言つた。帝は憤然として言つた。『朕はそれなら康辯を任用するぞ。』不気嫌な語氣だつた。」とあり、(新唐書卷一二六、張九齡伝)に

「張説(范陽の豪族)は宰相になり、張九齡を親任し、親類づきあいをした。いつも彼のことを「後世の詩人の冠たる人物だ」と言つていた。……玄宗は又涼州都督の牛仙客を尚書にしようとしたが、九齡はそれを抑え『尚書はその昔、納言とよばれ、唐の王室では古い宰相の家柄から任用されるか、又は永らく朝廷内外で官を歴任し、徳の高さで特に名声を博した人物だけが任用されてきました。仙客は河・湟地方の小役人にすぎず、こんな下つばを宰相にしたら、天下は何と申うでしょう?』と言つた。……帝は怒つて言つた。

『どうして仙客が寒士だからといって嫌うのだ? お前はそもそも門閥出身なのか?』九齡は頭を地にすりつけて言つた。『私は身分いやしい生れ(詔州曲江)ですが陛下の過分のおとり立てで、文才をもつて用いていただいております。仙客は胥史を擡ぶにも、文字を知らぬありさま、陛下がどうしても仙客を任用されるとすれば、

私は誠に恥かしく存じます。』天子は不愉快であった。……九齡はある時、長安尉の周子諒を推薦して監察御史とした。子諒は仙客を弾劾する文を上奏したが、文中に讒書を引用していた。天子は怒って子諒を朝廷で杖刑にし、瀛州へ追放した。」とある。

思うに張九齡はもと武后の時代に、詩詞によって拔擢された辺地の寒士であり、本来第三の新興階級に属していたのだが、張説と親類づきあいするようになって、自分も貴族の一員と考え、寒士とつきあわなくなつた。しかし玄宗は非凡な人だつたから、吐蕃のことを気にかけ、その方面に詳しい牛仙客を重用したのであり、そこには深いよみがあつたのである。周子諒は張九齡の息のかつた人間で、九齡は玄宗の牛仙客任用を妨げる手段がなかつたため、彼に凶讒の説を利用して仙客を誹謗させたのである。これは卑劣な手段と言わざるを得ない。元來凶讒は専制君主の最を忌み嫌うもので、これを利用すれば、百發百中となるのが普通だが、玄宗は、まったく取りあわなかつた。この事實は彼が非凡な天子であつたことを証明すると共に、唐代の社会問題が深刻を極め、政争の際には目的の爲には手段を選ばなかつたことがわかる。凶讒の説を利用するというこの手段は唐一代を通じてしばしば利用され、敵方が牛という姓でさえあれば、文句なしに姐上に載せられたのである。だから李党が牛党をおとしいれようとすれば、それは是非とも利用すべき道具であつた。周秦行紀をめぐる計画は更に一層陰險悪質である。つまり、牛僧孺が小説に巧みであつたから彼の名をかりて小説をつくり、宣伝したのである。(北夢瑣言卷一六、「木星入斗の条」)では「唐の乾符時間に荊州の節度使の晋公王鐸は、後に都道の都統となつた男である。ある時、木星が南斗星(二十八宿の一)に入りこみ、数夜にわたりて止まつた。晋公はこれを見て、……人払いをし

て術士の辺岡にたずねた。辺岡は『木星が斗に入るのは、帝王の兆で、木が斗の中に入ると朱の字になる。』と云つた。

物知りの言に、「唐代には朱の衣についての予言が横行し、このことに関係する人は、将来国運を變えろと言われた。裴の姓は上下にわけると、緋の衣となり、牛の姓は人の字をつけて朱となる。裴晋公(度)や牛僧孺は、こういう悪口に悩まされた。李衛公(徳裕)が周秦行紀で責めたてたのもこの伝である。それなのになぜ、碣山(朱全忠)の朱は問題にならなかつたのだらうか。」

右の文によれば、牛僧孺についての疑いは、朱全忠跋扈がはつきりして漸く晴らされたことになる。又、この文は周秦行紀の成立年代の考証にも役立つので引用しておいた。牛姓が凶兆の徴であるという疑いが解消されてしまえば、周秦行紀を書くいわれはないから。

さて、第二の点、「沈婆の息子が天子になる」という語と、「昭君が夜伽をした」という話は後人の懷疑をひきおこすのが常なのだが、作者の意図は結局何だつたのだらう。「周秦行紀論」の中では、

「太半(牛僧孺)は帝王の后と冥界で契り、自分が臣下でないことを証そうとした。又、徳宗を嘲つて『沈婆さんの子』と言ひ、代宗の皇后を『沈婆さん』などと言ふのは、きわめて恐れ多いことであり、君主に対して不敬の極であり、謀叛の志を持つという予兆と適合している。」という。

話はそうであるが、歴史上で皇后の数が多く、なぜ沈后と昭君がここで取り上げられたのだらうか? この二人の伝記を細かく考察すると、境遇によく似た処が多い。作者の主要な意図は暗に昭君を沈后に投影させることにある。沈后は安史の乱の時、二度胡人に身を任せているし(新唐書卷七七、沈后伝)を見よ。昭君は野蠻国の君主に嫁し、のち夫が死ぬとその子に嫁いでいる。沈后も昭君

も明らかに貞操を失った女ということになる。作中に沈後は恰好な素材だったのである。こういう経歴の持ち主は、作者にとって一石二鳥で、皇帝を一層激怒させ、被害者（作者とされる牛僧孺）の罪を更に重くさせることになる。また操を失った女と牛僧孺は何か関係があるのだろうか？ 作者が牛党の領袖を中傷し、打撃をあたえるのに適当だと考えた理由がもう一つあるのである。（通鑑卷二四三）の一節にその謎ときがある。

「宝曆元年春正月乙卯……僧孺を同平章事とし、武昌節度使に充てた。」という記事に（通鑑考異）を注として引用する。皇甫松の統牛半日曆に、「太牢は悪党どもと交り、密かに謀叛を企てていた。太牢は元和時代には青衫外郎（下級官僚）にすぎなかったのに、穆宗の時に、天子の直接推薦で、二三年もしないうちに將相の位を兼ねるようになった。憲宗の漸上行幸の時、侍従の官から召されて知制誥となった。当時は重臣は兼職しないことになっていて、集賢院と修史館だけは兼職できた。また宰相の印を受けた者は地方へ出ることはなかったのだが、太牢は同平章事（宰相）でありながら夏口へ出た。夏口は節度使が廢されていたが、太牢によって節度使（武昌）が設置された。太牢は若い時から孤児で、母の周氏は淫蕩なことで村でも評判な女だった。……兄弟がそれを恥じて彼女を再婚させ、前夫と義絶させた。（牛僧孺は）身分が高くなると、他へ嫁いだこの母に追贈（死後のおくり名）しようとした。礼記に『庶民の母が死んだのに、どうして孔氏の廟で哭するののか。』又、『伋也の妻でない者は白也の母ではない。』とある。李清心の妻が牛幼簡に嫁したのだから夏侯銘の言うように魂に知覚があれば、前夫はこの女を墓に入れないから、死んだら後夫が必ず天宮に訴えて、僧孺の母を不行跡のかどで落ちつき先のない幽霊にするにちが

いない。（彼の行為は）上は天子を偽り、下は先父を救くものであり、これを忠孝智識の備わった者と言えようか？ 徳宗を『沈婆さんの息子』と呼んだり、睿真皇太后を『沈婆さん』と呼ぶ。これは君主を侮辱すること甚しいものである。」

この一段の牛氏の母に関する記載と謾罵は、それこそ一針で血を吹くような文章である。全篇の重点は婦女の不貞又は再婚問題である。牛僧孺本人または牛家の事情に詳しい人が周秦行紀を読めば、ただちに作者の意図を読みとれるようになっていたのである。牛の母の行状からすれば、牛の家は賤しい身分から出ているにきまっている（牛自身は隋の司空牛宏の子孫と称しているが）小説を作った人間は故意に牛家のブライバシーに介入し、中傷しようとし、これによって牛僧孺の社会的地位をおとしめ、その政治的地位に害を与えようとした。このやり方は白居易が「新井」という詩で社会秩序を乱したとされ（白の母は井戸に落ちて死んだのに、白が「新井」詩を作ったので、中傷され、不孝の子とされ一生秩序破壊者とされた）そのために政治上、終生不利であったことと軌を一にする。この記載は周秦行紀の中で従来、難問とされていた謎に、一節の光を投げかけた。その上、この「婦女の貞操問題」は、周秦行紀の成立年代について一つの大きな啓示を示す。それについてはしばらく措き、のちの成立年代の議論で再び述べよう。

第二節 周秦行紀の成立年代

第二に我々が問題とするのは、周秦行紀がどの時代に書かれたか、ということである。この問題に入る前に、私はまず、周秦行紀、周秦行紀論、統牛半日曆の三篇は、互いに密接な関係があり、それらの成立時期は近接しているのではないかと考える。これらの

作品は、たとえ同一の作者の手になったものではないにせよ、作者間では一派相い通ずるものがあつたはずである。何故なら三篇の内容はすべて牛僧孺の天子への叛逆と、婦女の不貞を重点としているからである。周秦行紀と統牛羊日曆はともに牛氏を「太宰」と呼び、作者の主観的な怨恨が表現されている。書き方も同様である。周秦行紀論は明らかに周秦行紀のために作られたもので統牛羊日曆も周秦行紀に言及しているから、周秦行紀の成立が最も早く、あとの二つが少しおそいことがわかる。周秦行紀の成立年代は周秦行紀論を綿密に読むと、幾つかのヒントを得ることができる。論の作者は言う。

「私が以前政權を握っていた時、刑法の条文を正そうとしたが、力不足でできずじまいだった(玄宗の太和七年又は開成三年に、李徳裕が宰相であつた時)……また政權を握ることになって(武宗の会昌年間、李党の全盛期)そのこと(牛僧孺の不忠)を暴いてやろうとしたが、手がかりがなく、昭義を平げた時、牛僧孺と劉從諫のとりかわした手紙を入手し(会昌四年十一月、牛僧孺は劉從諫との交際があつた事が発覚し、循州長史に左遷された)。彼を追放できた。……故にこの論を書き私の志を示そうとしたのだが、彼の一族を滅せないうちに、又もや職を追われた(会昌六年四月、李徳裕は左遷された)。なんと、王者は死なすというのだろうか? 禍根を国に残してしまったことは、私の大失敗であつた。もし私と志を一つにし、正しい政治を継ごうと考えるなら(李党の立場で)天子の為に患を除いてほしい。……現代で不可能なら、子孫の時代に、かならず大宰の一族の老若すべての者を法の裁きにかけてほしい。刑罰が正しく行なわれてこそ、国家は安泰となり、二百四十年の後思無し、ということになるのだ。」

この文から引き出されるヒントは以下の如くである。

(一) 周秦行紀論の作者は(徳裕の口調をかりれば)「第一回目に政權を握った時に、刑法の条文を正そうとしたが、力不足でできなかつた。」と言っている。つまりその時はまだ周秦行紀が書かれていなかったから、言いがかりのつけようがなかつたのである。

(二) 作者が再び政權を握った時にも、試みたが手だてがなく、困っていた。劉稹(劉從諫の子)が謀反し、その時、牛僧孺とその父劉從諫の間の手紙(多分何でもない手紙)を探しあてたので、牛も叛徒の一味で謀議に加わつたことにして(唐史に見える)、牛をおとし、れ、ようやくのことで権力を握ることができた。故に会昌四年十一月以前には周秦行紀はまだ書かれていなかったと考えてよい。つまり牛氏が叛徒と交際したことを告発する際に、もしこの小説を証拠とできたら、彼の叛状は更に顕在化し、一挙に死地に追いやりたろうから。作者は又、「彼の一族を滅さないうちにこちらがクビになり」と言っている。会昌六年四月のことで、この時すでに武宗は崩じ、李党を最も憎み、牛党を寵愛する宣宗が即位しているので、武宗朝の時代には周秦行紀は書かれなかつたことがはっきりする。

(三) 「二百四十年後、思無し」という言葉は、単に時間的な輪廓を示すのみでなく、上述の二つの推測を大むね肯定させる要素を含む。唐高祖の武徳元年はAD六一八年、これに二四〇年を加えるとAD八五八年(大中十一年)となる。そこからただちに周秦行紀の成立をこの年と断定できるかという点、それはいささかうがちすぎた見方というべきだ。

(新唐書卷一七二、杜兼伝)に「開成の初年、玄宗は真源・臨真の二公主を士族に降嫁させようと思ひ、宰相に、『民間では、婚姻の時に、官位や品等を問題にせず、門閥貴族を尊いと考えるらしい、我

が二百年の天子の家が、どうして崔、盧などの家に及ばないのだからか」と言つた」とある。思うに唐は武徳から開成元年までで、二百十八年であるが、文宗はこゝで二百年としか言っていない。こういう場合に概数を用うのは習慣になつていたのである。さきの二百四十年も概数で、大よそ二百三十年と四十年という意味で、もし四十年以上なら二百五十年と言はずである。こういう習慣は、現在も往々用いられる。

以上のことから一般論を述べれば、周秦行紀は宣宗朝の作品であると推測できる。なぜならその時代は二つの政党が常に争い、政權が権力をバックに、敵対勢力を圧迫し、最も專制的な政治が行われていたからである。文宗朝のように両党が交代して政權をとつてゐる時には、お互いに相手の勢力の消長を知ることができ、武宗朝になると、李の全盛期で牛党の党人（党の首領も含む）は左遷されたり流されたりし、土つかずで残る者は無かつた。そして牛僧孺たちが追放されたのは、李党が彼を劉稹とともに謀叛したと中傷したからで、周秦行紀を問題にしているわけではない。宣宗朝になると、牛党はまた政權の座に返り咲き、李党は追い落された。野に在る党の唯一の武器は文章にケチをつけることしかない。だから小説の作者は禍の及ぶのを恐れ、社会の現実生活に題材がふれないように、鬼怪神仙の物語に托して現実を描くのだ。以上のことから、この小説が牛党全盛期（宣宗朝）に書かれたもので、武宗朝のものではないと言つてよい。

周秦行紀の成立が宣宗の大中年間であるとすれば、その根拠がある。それは前述の女の貞操問題である。唐の王室は元來胡人の系統で山東貴族とは人種がはっきり違い、朱子語録に言う「閩門失礼之事」が極めて多かつた。ことに胡人に嫁いだり、再婚したりという

事は、初盛唐の時期には日常茶飯事であつた。新唐書公主列伝記載の高祖の十九人の娘のうち胡人と結婚した者が半数を占め、再婚者も四人いる。それ以後公主で胡人や漢族以外の人と結婚した女が各代にあり、又夫に死別した後再婚し、三婚した者もあつた。代宗の後沈氏は二度も胡人に攫さらわれて行方不明となり、徳宗（沈后の子）が即位すると、四回目の結婚相手を探し出して嫁し、大后の位を空位のまゝ数年ほつておいて恥じることもなかつた。この風潮はなぜ産み出され、また何時頃盛んになつたのだからか？

（新唐書卷一四六、李吉甫伝）に

「天子の一族の息子たちは、外に封ぜられて出ていなかつたし、又その娘たちの結婚の時期はまちまちであり、その結婚の相手の選定はすべて宦官に厚く謝礼をし、その仲介によつて成り立つてゐた。吉甫は奏上した。『古代以来、公主の嫁ぎ先は、慎重に人物を選び、南朝では名士だけをそれにあてていましたが、近年ではちがつてきてしまいました。』帝（憲宗）はそこで詔を下して、娘たちを県主に封じ、門閥出身の高級官僚をその配遇者とするにした。』この記述から、中唐期以後、山東貴族が政治勢力を再興してきて、礼法尊重の風潮が強まってきたことがわかる。又（新唐書卷八三、公主伝）では次の記述が見える。

「万寿公主（宣宗の娘）が鄴へいに降嫁した。帝は公主を寵愛していたので、詔を下した。『先王の礼の定めには、貴賤を問はず従わねばならぬ。万寿公主は舅姑を尊び、士人の礼法にしたがわねばならぬ』と。……又『夫婦は教化の端である。公主、県主（諸王の娘）で子ができて寡婦となつた者は、再婚を許さない。』更に（唐会要卷六）に『大中（宣宗朝の年号）五年四月、勅令により、現在以降すでに降嫁した公主、県主で子女ある者は、再婚を許さない。子女

が無い場合も宗正(皇族関係の係官)に申し出て法に基いて処置される。子女がありながら無いこととして再婚を申請した場合、所管の役所で十分な調査をした上処分を定める。」

これはすでに晩唐期のもので、憲宗時代から四、五十年あとの事がらである。こゝでは一般人だけでなく、公主も士族の礼法を守らねばならず、子供を生んだ女は再婚を許されなかった。何故ならそうしないと士族が皇族と婚姻関係になることを喜ばなかったからである。万寿公主の婿となった鄭願はもともと盧氏と結婚するはずだったのに相手をかえさせられ無理に公主と結婚させられ、一生、その原因をつくった白敏中を恨んだ(白が彼と公主との結婚を天子にすゝめた)と言われる。この時代に、女性の貞操をきびしく縛る風潮が最高潮に達し、貞節を尊いとする観念が一般にも滲透していったことがわかる。逆に言えば不貞でだらしない女は社会的な蔑視を蒙るだけでなく、その家人も、それを大きな恥として受けとった。故に前述したように、昭君には沈後の影がさしているだけでなく、牛僧孺の母の影をも宿している。作者はこの事からませて牛僧孺の社会的名声と地位を破壊し、更に牛党の政治勢力に打撃を与えようとしている、と考えても、全く根拠のない憶断とは言いい切れまい。

この考察は周秦行紀の成立年代推定にも役に立つ。つまり、周秦行紀は女性の貞操観念がすでに社会的に定められ、女性の不貞を恥とする一般通念が形成された時代の産物であるということである。もしそうでなければ、小説中で攻撃されている事柄がすべてのはずで無意味なものになってしまうからである。

以上の諸点から周秦行紀の成立年代は宣宗朝とするのがもっとも理に叶っている。ではそれは大中年間の何時ごろであろうか。私見によれば、それは大中元々四年の可能性が高い。周秦行紀は作品を

牛僧孺に、周秦行紀論は作者を李德裕としている。牛李両党の首領が名を出しているのは、この二人の地位と身分を利用し影響力を高めようとする配慮であろう。牛僧孺は大中十二年十二月二十九日没、同三年五月十九日に葬られている(全唐文卷七二〇)、李珣、故丞相太子少師贈太尉牛公神道碑銘並序による)。李德裕は大中三年十二月二十日以後に没している(李德裕貶年死月考・陳寅恪「中央研究院語文研究專刊五本二分」参照)この場合、李德裕は嶺南の配所で死に、その情報が都に達するのが遅れることもあり得るが、それでも大中四年には都に伝わっていたと考えられる。即ちこの二篇の成立は二人の死からそれほど大きくへだたらない時代、二人の著者名が信じられる時代と考えられる。大中一々三年が最も可能性が高い、というのは牛僧孺は宰相に起用され、着任以前に死んだ。周秦行紀は、彼の死以前又は死が知れわたる以前に、書かれたはずだと考えられるからである。当時実際の宰相は白敏中だったから、もし牛党を攻撃する意図があり、牛氏の死を知っていたら、現に政権の座にある新しい主領白敏中を攻撃するはずである。その上この小説中では牛氏のプライベートルな問題を重点にしているから、もし彼が死んでいれば攻撃する意味がなくなってしまうのである。周秦行紀論の中で「私と志を同じくする人(李党の人)がひき続いて政権を執り、天子の為に患を除いて欲しい。もし今できないならば、子孫の代でもいから、大牟の一族をすべて法の下で裁いて欲しい。」という。「今できないならば、子孫の代に」という表現から考えれば、明らかに攻撃目標はまだ生存中だが、かなり年をとっている。「わが党の同志がひき続き政権を執り」「天子の為に患を除く」まではもたないから、彼の子孫に刑罰を加えることもかまわない、ということにならう。即ち作者が周秦行紀論を書いた時点では、牛僧

孺は生存中もしくは生存すると考えられていたに相違ない。又、周泰行紀はそれ以前に書かれたはずだから、大中一―三年が相当しよう。更につけ加えれば、周泰行紀論もその作者とされている李徳裕の生前又は死後間もない頃までに書かれているはずである。因みに李氏作とされる窮愁志のうちにも彼の死後に書かれた作品がいくつも含まれているが、それらも彼の死後さほど時を経ぬうちに書かれていることはたしかである。周泰行紀論の作者は、読者が小説の主題をはっきりつかめず、作者の意図がわからないことを恐れ、わざわざ李徳裕の名を借りてきて、暗示しようとしたのである。この論の出現が牛・李の死後永い時間を経たとすれば、時事性を失うだけでなく、かならず人々から作品の信憑性を疑われてしまうだろう。

第三節 周泰行紀の作者

周泰行紀の作者については、従来多くの推測がある。五代及び五代以前の人々は、牛僧孺を作者と考えていたらしい。孫光憲(五代)の北夢瑣言の牛僧孺奇士の項に

「牛僧孺は周泰行紀を書き……李徳裕は「論」を著してこれを断罪し、それによってまともな人間は大いに驚ろいた。衛公(李徳裕)が賢者を抑え、善行をねたんだというわけではないが、牛相(僧孺)は大難に会わず、うまく逃れたわけだ。」

と言う。五代末から宋初にかけては、この説を疑った人がでてきた。最初に牛氏の為に、冤罪を弁じたのは張洎の賈氏談録(五代宋初の作)で、宋の晁公武の郡齋讀書志にはこの書物を引用して次の如く言っている。

「周泰行紀は唐の牛僧孺が自ら経験した怪異を述べたものとされているが、賈黄中(晁公武)が書いたと言ふ。瓚は李徳裕の門人、この

作で牛僧孺を中傷した。」

実際、常識的に言っても牛僧孺が周泰行紀を書いたとは考えられない。小説の冒頭に「余は貞元の進士にして」と書き、後に「僧孺姓は牛」と自己紹介をしているが、物を見る目のある人ならば、すぐにこの作が牛氏自身のものでないことを見つけてしまうだろう。

正史の上で、周泰行紀が当時社会的に何等かの反響をひきおこしたかどうかについて、一字も述べられていない。人々の注意を引けなかったのも牛僧孺がその作者でない理由の一つとなる。

張洎は、周泰行紀を韋瓘作とするが、その根拠を明示していない。この点について研究してみよう。(新唐書卷一六二、韋瓘伝)には「正郷の子瓘は字を茂弘と言ふ。進士に及第し中書舍人まで上った。李徳裕と仲好く、徳裕が宰相の時、相談役が少いなかで、瓘だけは親しい交際を保った。李宗閔はそれを快く思わず、徳裕の罷免に際して瓘を明州長史に左遷した。今昌の末、楚州の刺史となり、桂林觀察使で終った。」

とある。李宗閔は会昌四年十一月に牛僧孺が劉從諫と交際した事件に連座して封州へ流された。すると韋瓘の明州長史への左遷はそれ以前、李宗閔の失脚以前でなければならぬ。李宗閔(牛党)の失脚後、韋瓘は地位を漸次回復し、楚州刺史、桂林觀察使となっている。又、全唐文卷六九五には韋瓘作の語溪筆記を引き「官位を全うせず帰ったにせよ、私はやはり杜陵の一人の男、……洛中へ帰るとなれば、仕官も罷官もよくよするにはあたらぬ。大中二年十一月十七日」とある。

会昌六年三月に武宗が崩じ、宣宗が即位する四月に李徳裕が宰相を罷免される。この時李党の面々は位を降下され、左遷され、地方へ出された。韋瓘の文は大中二年十二月七日に全くの浪人となって

洛中の旧宅に帰って来た時に書かれたのであり、この時牛僧孺は生存中であつた(同年同月二十七日死亡)したが、この時期に韋瓘が周秦行紀を執筆することは時間的には可能であつた。

この外に二つの点について付帯して説明しよう。今後の新しい発見に備えて、以上の諸問題の補足として、

(一) 前述の如く、周秦行紀、周秦行紀論、統牛羊日曆(皇甫松作)の三篇は、密接な關係をもつ。周秦行紀論は、牛氏に関する予兆が現実化する事を重点的に論じ、統牛羊日曆は専ら婦人の不貞を重視する立場で書かれている。この二作の目的は、いずれも周秦行紀を注解することである。二作が通じあつて、相い補う關係になつていたので、私はこの三篇は同一人物の作か、又は二、三人の共同執筆ではないかと考えた。そこで統牛羊日曆の作者について研究することとなつた。皇甫松について唐史では探し出せなかつたが、稗史雜記の中で偶然彼に関する記述の断片を発見した。王定保作の(唐撫言卷十)に、

「皇甫松は(醉郷日月三卷)を著して、自分のことを述べている。その中で、松は奇章(牛僧孺の爵号)の母方の甥だつたが、僧孺は推薦してくれなかつた。そこで襄陽で大水が出たとき、水害を論じ、牛氏を口をきわめて誹謗した。又、「夜真珠ノ室ニ入り、朝ハ瑠璃ノ宮ニ遊ブ」という詩句があり、牛僧孺の愛妾の名、真珠をよみこんでいる。」

という記述がある。又、羅虬の「比紅児詩」第五七首に、
「昔年黄閣ニ奇章ト識ル、真珠ノ窈娘ニ似タルヲ悦説ス 若シ紅児深夜ノ態ヲ見バ、便チ心ニ繡衣裳ヲ悦ブヲ休ムベシ」とある。この二つの資料から次の三点がわかる。

(一) 通鑑考異に統牛羊日曆が引用されていて牛僧孺が武昌節度使に

なつたことに言及するが、それと撫言の襄陽の水害の件とは符合する。

(二) 羅虬の比紅児詩一百首は、古今の有名な美人と、自分の愛妓紅児を比べて作った詩であり、こゝで出てくる真珠も当時実在の人物で、奇章(牛僧孺)の愛姫であつたことが実証される。

(三) 皇甫松は「醉郷日月」を著した。この本の内容は、遊芸に関することばかりである。ここでは、晩唐の進士が、小説を書き、文を弄び、色町で遊ぶという三つの特色を説明する。そこから作者皇甫松が、遊び好きの若い進士であり、牛僧孺の推薦を受けられなかつたことを想像できる。皇甫松は牛氏の甥だつたが、私的な怨みで敵方につき「水害のときにかこつけて、口をきわめて悪口を言った。」ということと脈絡をたどれる。皇甫松と周秦行紀とは密接な關係を持つと断定できよう。

第二につけ加えて説明すべきことは、胡応麟の(四部正論)に次の記述がある点だ。

「周秦行紀は李徳裕の門人が牛奇章の名を偽つてでっち上げた本である……おかしいのは思黯(牛の字)がこの大変な誹謗に悩まされ、すぐさま自分の立場を明らかにする態度をとらなかつた事である。牛僧孺は玄怪録を著わしたが、その中で李氏と事をかまえるような言葉は無い、李氏の徒はこの本を作り、牛氏を害せうとした。

この両者の下心がはつきりうかがわれるではないか、牛氏は功名を遂げ、子孫が繁栄したが、李氏は、勝れた才を持ち世間に名をとどろかし、功績を積んだのに、その最後は、海南島で落ちぶれて死んだ。これは李氏が、他に對してひどく嫉妬深く、酷薄だつた報いではなからうか。」

胡氏のこの見当はずれの論は、彼が唐代の現実社会とその政治状

況に無知であることを示している。これは従来の研究者のおちいり
がちな陥穽でもあった。もともと政治とは手段を選ばぬしるもので
あり、個的なモラルとは何の関りもない。右の問題も、胡氏の如く
に道徳的か不道徳的かという次元のものではなく、政治上の目的を
達するか否かという問題なのである。幾つかの記録から見れば、李
徳裕は私生活においては、まさに正人君子であったが、こと牛党に
対する時は、様々な陰謀をめぐらした人物であった。又、牛党が李
党に対する時もまったく同じであった。牛僧孺の「支怪録」に李氏
を誹謗する言葉が一つも見あたらないことが、決して牛氏のモラル
の高さを示すわけではない。支怪録が周秦行紀よりはやく書かれた
だけのことである（周秦行紀論に支怪録について言及した所があ
る）。その上、第二節で述べたように、牛氏は多分、周秦行紀を見
ていないのだから、これに反駁し得るわけがないのである。たゞこ
の胡氏の論は、周秦行紀の成立に関する旁証を提出している。「牛
氏の子孫は歴代繁栄した」という指摘は正しく、ことに僧孺の息子
の叢は更に貴顕の位についた。宣宗は彼をほめ、「牛氏に息子があ
り、彼は人の心をなごませる」と言ったことがある。威通時代にな
ると叢は「尚書僕射をもつとめ、死んだ」のである。これに反して
李氏の子孫は、李徳裕の息子の焯が最高位で、司勳員外郎になつた
だけで、その他の子供達は皆、配所で死んだ。牛李二氏の盛衰は政
治的闘争の結果なのであり、胡氏の言うごとき、因果応報のあらわ
れではないのである。大中年間に牛党が政権を握つたため牛氏の子
孫は発展したし、李氏の子孫は皆配所にあつたのである。大中は十
三年間つゞき李氏の子孫はこの間不遇つゞきであり、政界に残れた
ものは殆んどなかった。威通以後は又新たな政治的局面、政治的な
問題が生じ、牛李二党の争は次第に終熄にむかうのである。のちに

崔珙（崔珙）のような人々（嘗って李徳裕と関係の深かつた一派）が政界に
登場してからも周秦行紀論の中に込められている止みがたい報復と
念を忘れはててしまい、李氏の子孫を永いこと不運のままにしてお
いたことは理由がないわけではないのである。このような政治情勢
の変化ということは、前述したこととともに、周秦行紀が威通以後
に書かれる可能性のないことを証明するわけである。

註

- (1) 原文は「向声背爽」で切れているので意味が不明となる。括弧内の
語を補った。
- (2) 原文では神基伝となつてはいるが正しくは崔珙伝、新版では改められ
ている。
- (3) 聖神皇帝とは武后の自称である。
- (4) 朱全忠は唐末五代の人、唐王朝を亡ぼして梁をひらいた。だから牛
や裴などとくらべものにならない悪者のはずなのに予言がされなかつ
たことを皮肉つているのである。
- (5) (新唐書卷一七四、牛僧孺伝)によれば牛僧孺が武昌節度使になつ
たのは敬宗の時である。
- (6) いずれも礼記・檀弓にある。はじめの方は、(下篇)で子思(孔子
の孫)の母は子思を産んだのち他家に嫁いでいて、衛の国で死んだ。
子思が自家の孔子廟で哭していると、門人がその行為を道にはずれた
としていぶかった言葉である。あとの方は(上篇)所収、子思が息子
の白を得たのち妻を離縁した。この妻が死んだ時に、息子が母の喪式
をしようとしたのをやめさせた時の言葉、彼とは子思の実名である。
二例ともに、離縁した母親に対する息子の態度について言及し、牛僧
孺の行為を非難している。
- (7) 太宰とは牛豚羊の三種の犠牲のことを言う。牛僧孺の姓にひっかけ
た悪口である。

(8) 武宗の会昌三年に、昭義(山西省)の節度使劉從諫が死に、その子積が叛した。李徳裕がこれを平定した。

(9) 以下 8 ページ 8 行目の「以上のことから……」までは新版では省かれている。

(10) 原文は「夜入真珠室、朝逐珊瑚宮」としているがここでは上海古籍出版社一九七八年一月刊の唐摭言によって改めた。

補説

周秦行紀の作者、及び成立年代については劉氏のこの説以後、近藤春雄氏が「唐代小説の研究」(S 53・12・笠間書院刊)で、又王夢鷗氏が「唐人小説研究 四集」(78・10 芸文院書館)で、それぞれちがった見解を述べている。ここにその概略を記す。

近藤説

賈氏談録に、開成年間(八三六―八四〇)に文宗が憲司(文書検閲官)が周秦行紀の表現内容について罪をただそうとしたのに対して笑って、「これはきつと牛僧孺の名をかたったものだ、なぜなら僧孺は貞元中(七八四―八〇四)(徳宗朝)の進士だから徳宗を『沈婆の子』と呼ぶわけがない」と言った。とある。こゝからこの作品はすくなくとも開成年間には出されていたと考え、劉氏の大中年・二・三年説を否定する。

またこの作品は劉氏の如く、李徳裕一派の意図的な作品とは見ないで、作品ができ上ってから、牛李の党争に利用され、後代の学者は牛僧孺を擁護する立場から、韋灌偽托説を作り出した。と説く。更に「この作品自体は牛僧孺の作で、しかもそう信じられていたものであり……党争とは関係なく、さらに早く作られたとも考えられる」と結論し、韋灌偽托説に否定的な見解をとる。

王氏説

王氏は、周秦行紀、周秦行紀論、牛羊日曆の三者を同一の意図のもとで作られた作品と考え、周秦行紀と牛羊日曆は牛僧孺本人、周秦行紀論は牛

の二人の息子をそれぞれ攻撃目標として書かれた。とする。そして行紀と日曆の有効な年代は文宗の大和末―開成(八三五―八四〇)論の有効な年代は大中―咸通(八四七―八七四)であるとし、行紀と日曆ができてから論ができるまで十数年の時間的なへだたりがあるのに一貫して同一の意図をもちつづけるのは一人の人間しか不可能だとし、この三篇の作者をすべて韋灌と考える。韋灌は、牛僧孺に仮托して周秦行紀を書いた上、牛僧孺と交際のあった尊愈の門人の劉阿、皇甫湜の息子の皇甫松の二人に仮托して牛羊日曆とその続編を書き、更に李徳裕の名で窮愁志を編輯し、そこに周秦行紀論をつけ加えたのだと結論する。王氏のこの説は劉氏の名はでてこないが、三篇を一括して、政治的意図で書かれたものとする点、周秦行紀のテーマと、牛僧孺の母親の貞操問題に関連させて考える点等、多くを劉氏の説に負っていると思われる。